

東日本大震災から一年 店舗新築で新時代を築く

香りの鈴文、仏壇の鈴文

ひとつの店舗でふたつの顔

鈴文(土浦)

平成二十三年三月十一日は住居兼用なので、住宅日、鈴文の鈴木常生専務のドアの方に回ってみるはつくば市内で仕事中大震災に遭遇した。ただ事ではない揺れに「店舗が大変なことになってい」と心配しながら土浦の鈴文本社に戻った。

戻ってみると、まず店舗の自動ドアが開かない。ドア枠そのものが歪んでしまいドアが開かなくなっているのだ。店舗

無傷は五本。ほとんどが商品として使えないほどのダメージを受けていた。

一週間過ぎた頃に工務店の人が来てもらいお店をそのまま使えるように「なんとかならないのか」と聞くと、返事は「なんとかならない」ということであつた。床面が波打ち、床下の梁が上がつてきているような厳しい状況

況で店舗を再び使うことは不可能、新たな店舗を作る必要があつた。

では、どのような店舗にするのか。これまで通りの仏壇展示主体の仏壇店にするのか、その場合規模は縮小するのか、あるいは香りや珠数などを前面に展示する店舗にするのか。もちろん、厳しい経営環境の中で新築した場合の資金の問題もあつた。

鈴木専務と父鈴木社長の間では随分と議論が交わされ、最終的には次代を担う鈴木常生専務がイメージする店舗を新築することになった。

鈴文の創業は明治時代に遡り、初代民吉氏は建築家であつたという。二代目文助氏の時代は建築業・大工として商売を広げ、三代目の長次郎氏の時に「宗教用具関連へのスイッチが入つた」という。建築・大工の技を生かして神棚、柩や祭壇を作り、葬儀の手伝いも行うようになり、四代目一生活の代には仏壇も扱いはじめる。

一生活の時代に、鈴文は法人化するが、「たくさんのお客様が、気兼ねなく寄れる雰囲気」が店に溢れていた」と鈴木専務は語る。一生活が亡くなったのは一昨年のこと。「おじいさんの時代の鈴文の雰囲気は私にとつてのお手本であり目録。でも仏壇の上に仏壇を乗せて展示するような販売の方法には疑問を感じてきた」と一生活の思い出を語る。

鈴文は葬祭部門を併設し、斎場も二カ所持つ。震災後、仏壇店舗の電話が不通のため、葬祭営業の電話に仏壇店舗への電話も転送されていたが、「仏壇が倒れたから見に来て欲しい」「位牌が倒れて傷付いた」「仏壇倒れた」というひっきりなしの問い合わせに「鈴文は地域の方々から信頼されている」と強く感じ、より親しみやすい店舗とすることで、お客様との信頼の絆を強くしたいという思いを深めた。

大震災による店舗の被害は次代の鈴文に向けてチャンスとなった。「きっかけを待っていた」と鈴木専務は語るが、それは変革のチャンスでもあつた。

店舗新築までの間は店舗に隣接する倉庫で営業をすることになった。実際に仮店舗での営業がスタートしたのは震災後一ヶ月後のこと。使える什器を利用して、台付き仏壇を五本、上置仏壇を六本、そしてお線香・ローソク類を展示した。

店舗新築にあたり大切にしたいと思つたのは、一生活時代の「お客さまが気軽に寄つて下さる空間」であること。気軽に「お茶を飲み、気軽に近所の人が話をしに来てくれる空間であることを大きなポイントとした。

そのために鈴木専務が考えたのが、「香りの鈴文」と「仏壇の鈴文」。

同じお店で二店舗の空間を持つ仏壇店にするということであつた。この発想は以前から抱いていたものであつたが、「広告を打ちやすい」「地域の方々に周知していただきやすい」「来店される客層の年齢層を下に広くしたい」ということをポイントにしたものだ。

「仏壇店であることに慣れてしまうと、二十万円の仏壇でも安い仏壇と感じてしまいますが、お客さまにとっては二十万円という予算は決して安い買い物ではないはず。同じ二十万円の仏壇を購入していただくにしても、より高級感のある、芸術品として見える展示空間を絶対に作りたいと思

ました」と鈴木専務は語る。「物ではなく、店を選んで頂く」という発想であり、それは葬祭業を営む鈴文の顧客を増やすことにもつながる。

店舗の基本レイアウトは中庭を中心に始まり、この中庭により香りの鈴文と仏壇の鈴文が生まれ、この中庭は元々の店舗二階部分に一生活長が作っていたもので、その中庭で使われていた石などを、新たに作る一階中庭にそのまま使うことにした。店舗に入つてすぐは「香りの鈴文」の空間、中央に中庭と仏壇へと繋がる通路をつくり仏壇・位牌を展示、そして店舗奥に「仏壇の鈴文」を配置した。

二階は事務所と和室。和室ではすでに英会話教室を開催、これからはライフプランニング、ヨガ、アロマの教室をそれぞれ開催する予定である。新店舗オープンにより、さらに鈴文ファンが増えることが期待される。



鈴文(土浦) 店舗ファサードはガラス構成で店舗奥まで見える開放感がある



店舗一階は香りと珠数を中心に構成 僅かに仏壇が奥に見える 中央は鈴木常生専務



香り・アロマの展示



珠数の展示 工夫を凝らした展示方法だ



店舗ほぼ中央に仏像と位牌の展示



店舗最奥部の仏壇展示 森の中の木漏れ日に包まれている感覚



唐木仏壇の展示 国産品中心の商品構成



二階吹き抜けから一階を見る



英会話教室も開催される二階和室

鈴文 茨城県土浦市中央一丁二一十六 TEL 029-822-0311 FAX 029-822-6277